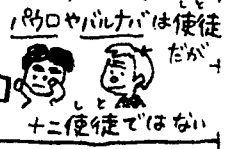



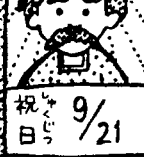

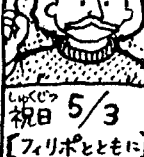










イエスさまの十二弟子



十二使徒ではない

<p>1</p>  <p>聖ペトロ</p> <p>本名 シモンバルヨナ。イエスにつけられた「岩」という意味のあだ名「ケファ」を、ギリシア語に訳すと「ペトロ」になる。元はガリラヤの漁師。素直で情熱的で、なつとあつちこちよい。使徒の頭。イエスに天の国の鍵を授けた。初代教皇。イエスと同じ刑を受ける資格はないと言って、逆さ十字での殉教を選んだ。</p> <p>祭日 6月29日</p> <p>聖パウロととともに祝われる</p>	<p>7</p>  <p>聖トマ (トマス)</p> <p>イエスが復活し弟子たちに初めて現れたとき、ひとりその場におらず、あとで仲間たちの証言を聞いても信じようとしなかった。八日に再び来られたイエスに出会い、信じた。ペルシアで宣教、南インドで反対者たちから全身に槍を受けて殉教。</p> <p>祝日 7月3日</p>
<p>2</p>  <p>聖アンデレ (アンドレア)</p> <p>ペトロの兄弟。出会ったイエスのもとへペトロを連れて行った。いまのギリシア付近でX型の十字架にかけられ殉教。</p> <p>祝日 11月30日</p>	<p>8</p>  <p>聖マタイ福音記者 (レビ)</p> <p>徴税人として働いている時イエスと呼ばれ弟子となった。美しい福音書を記した後、エチオピアに宣教、殉教したとされる。</p> <p>祝日 9月21日</p>
<p>3</p>  <p>聖ヤコブ (大ヤコブ)</p> <p>ゼバダイの子でヨハネの兄。兄弟そろってイエスが「雷の子」と呼ばれた。スペインにまで宣教したらしい。十二使徒のうち最も早くにエルサレムで殉教。遺体は仲間らによってスペインに送られたという(サンチアゴ・デ・コンポステラ)。</p> <p>祝日 7月25日</p>	<p>9</p>  <p>聖ヤコブ (小ヤコブ)</p> <p>アルファイの子、イエスの親戚。ペトロとともにエルサレムの教会を指導。新約聖書「ヤコブの手紙」の著者。エルサレムで壮絶な殉教をとげた。</p> <p>祝日 5月3日</p> <p>【フリポとともに】</p>
<p>4</p>  <p>聖ヨハネ福音記者</p> <p>十二使徒で最も若く、十字架のイエスのもとに聖母マリアとともにどまり、忠実な信仰を示した。格調高い福音書のほか、流刑になってからも黙示録を書き送って、迫害下の教会を励まし続けた。</p> <p>祝日 12月27日</p>	<p>10</p>  <p>聖タダイ (タデオ または ユダ)</p> <p>新約聖書「ユダの手紙」の著者。最後の晩餐ではイエスに質問する(ヨハネ14:22)。今のイラク、イラン方面で殉教か。</p> <p>祝日 10月28日</p> <p>【シモンとともに】</p>
<p>5</p>  <p>聖フィリポ (ペリポ)</p> <p>最初の弟子の一人。ヨハネ福音書に出てくる彼は、なつとまじめで、シャイなところがあつた(ヨハネ6:7、12:22、14:8)。フリギア(いまのトルコ)で宣教し、殉教した。</p> <p>祝日 5月3日</p> <p>【小ヤコブとともに】</p>	<p>11</p>  <p>聖シモン (熱心党のシモン)</p> <p>宗教的伝統を守り、ローマ帝国の支配に反対する「熱心党(ゼーロータイ)」のメンバーら。イラクで宣教、イランで殉教か。</p> <p>祝日 10月28日</p> <p>【タダイとともに】</p>
<p>6</p>  <p>聖バルトロマイ (バルトロメオ)</p> <p>ナタナエルとも呼ばれ、友人フィリポに誘われイエスに従った。ピルメニア宣教中に捕らえられ、生きたまま皮を剥かれ、首を切られて殉教。</p> <p>祝日 8月24日</p>	<p>12</p>  <p>イスカリオテのユダ</p> <p>ガリラヤではなくユダヤ地方の出身らしい。使徒たちの会計係で、不正を行っていた(ヨハネ12:6)。イエスを銀貨30枚で裏切り、のちに後悔して自殺した(マタイ27:5、なお使徒言行録1:18によると転落死)。</p> <p>聖マチア (マティアス)</p> <p>イスカリオテのユダの後任として、くびきで使徒に加えられた。黒海、カスピ海方面へ宣教し、殉教。</p> <p>祝日 5月14日</p>

日の昇るところから日の沈むところまで 主の御名が賛美されるように。 詩編 113編 3節